

お止橋

薄井 八代子

寛永十七年（一六四〇）二月

のことである。

讃岐の金毘羅大権現に仕える

社人蔵太夫は、ある雪の朝、邸の

ある五条八幡宮の近くで、行き倒れ

たまま、凍えきっている二人の男

を助けた。

白髪の月代もおどろなその男た

ちは、長い流浪の果か幽鬼のように

やせて、すっかり体を痛めていた。

邸に連れて帰り、菓草を煎じて

のませると、気がついたが口をきく

気力もなかった。

「ゆつくり養生するがよい」

ひとり者の蔵太夫は寝ついた男

たちのために隣家の百姓女に

世話を頼んだ。

一月ほどたつて歩けるようにな

つた男たちは、蔵太夫に、

「野ざらしになる身をお助け頂き、

お礼の申しあげようもございま 1

せぬ。行くあてもないわれら兄弟、

どうかおそばにおいて、走り使いに

なりとお使いくださいませぬか」

と申出た。

病みあがりの男たちの色こそ陽

に焼けているが眉目優れ鼻梁高く

整った顔や、身なりに似合ず礼儀

正しい振舞いをみて蔵太夫が尋ね

た。

「何か子細あつて旅に出たのか」

「申し遅れました。わたしは

阿波国祖谷の生れで松太郎、弟は

権太郎と申し、平家の落武者の裔で

ございすが……」

と伏目がちに、讃岐に流れてきて

行き倒れるまでの経過を物語った。

その話は数奇に満ちており、

蔵太夫の涙を誘った。

話は遠い昔にさかのぼる。一の

谷の戦に敗れた平宗盛が、安徳

天皇を奉じて海路讃岐の屋島から

壇の浦へ落ちて行つたのは文治

元年（一一八五）の二月である。

この時、平教盛の二男国盛は、

阿波の秘境祖谷へ潜行せよとの秘

命を受けた。一行は童を含め

三十六名、その半ばは婦女子であ

つた。源氏の眼をかすめるための蔭

武者の一行か、再起を期しての潜行

か、今となつては知るすべもないが、

彼らは平家滅亡のあとも、ひっそり

と秘境で生き続けた。

歳月は流れて天正十三年

（一一五八五）五月、秀吉の命に

より阿波に移封された 2

蜂須賀家政は、「太閤検地」の実施に

あたり、

「検地に反抗すれば、一郷も二郷も

悉くなでぎりに

すべし」

と、きびしい姿勢で臨んだ。

それに抗して各地で土豪が一斉

に蜂起した。

祖谷でも度々会議が開かれた。

全員が抗戦を主張する中でただ一人国学者玉尾松右衛門が、

「領主の検地に反対するのは不利

である、この地の特殊性を認めさせ

て検地に応じ、年貢を免じさせれば

よい」

と反対した。

しかし、いきり立っている人々は

耳を貸さず「抗戦」を主張した。

松右衛門は、

「避地に住むわれらの排他性や

料簡の狭さが未代まで子孫に累を

及ぼさぬよう、よく考えるべし」

理を尽くして説いたが、ついに

抗戦と決まった。しばらく眼をとじ

て瞑想に更けついていた松右衛門は、

伴松之介を呼び、父祖伝来の

越中国住人則重の名刀をわた

し秘策をさずけた。

松之介はその時二十才、文武両道

に秀で鄙にはまれな美丈夫であつ

た。

彼は仲間百余名と共に、鬱蒼たる

樹海の中へ姿をかくした。

蜂須賀の代官兼松惣右衛門が

手兵三百名をひきいて阿波池田

を出発したのは、天正十三年

九月九日未明である。

池田から祖谷のかずら橋まで

山道八里(三二キロ)更にそれか

ら奥は、魔の谷と呼ばれる難所が果

てしなく続くのである。

周囲を高山に囲まれ、その外郭を

吉野、祖谷、松尾の三河川が流れ、

さながら城の外堀の役目を果たし

ている。陰曆九月も半ば近くになれば、

祖谷は既に晩秋のけはいがただよ

う。日中は澄みきつた蒼空が高く、

日差しも暖いが、日暮れともなれ

ば、霧が流れ視野もさだかではない。

松之介は、鬱蒼たる原生林の間

に本陣を置き、かがり火をたかせ、

猿酒で士気を鼓舞し待機させた。

山々の尾根に出した物見からの、

のろしを合図に敵が近づくや、かね

て用意の木材、岩石を敵の頭上から

一挙に落した。

眼下は千仞の谷である。辛うじて

難を逃れた者は、竹ふすまが待ちう

け、弓矢が襲いかかった。

地理に暗い代官は馬もろとも

渓谷に落ちて討死し、僅かに生残つ

た兵も、我先にと逃げ帰った。

この知らせを聞いて蜂須賀家政

は烈火の如く怒り、九月二十五日、

自ら二千騎をひきいて、祖谷征伐

に向つた。

奇襲により初戦に勝つた祖谷勢

も、蜂須賀の鉄砲隊には手向う術

もなく総崩れとなつた。

松之介は形勢不利と悟るや、仲間

を悉く深山幽谷に潜伏させた。こ

の見事な退却ぶりに恐れをなした

家政は、

「残党狩り」

を命じ、祖谷の男を老幼の別な

く捕えては獄門にかけた。

玉尾松右衛門は蜂須賀勢が邸に

迫るや、

「死して祖谷を守らん」

と柱に書き残して切腹して果て

た。それは夕陽が峻嶺のもやに、円

い虹を残して沈む晩秋の黄昏であ

った。祖谷の女たちは、

「松右衛門様があれば反対なき

った戦を始めたばかりに、今に

祖谷は男のおらぬ山になる」

となげいた。

この祖谷一揆が一応おさまった

のは天正十八年（一五九〇）

で、実に六年間祖谷の民は戦いつ

つた。その間に家政は、祖谷の隣村

一宇村の土豪喜多六郎三郎を味方

に抱き込み、祖谷の名主たちを説得

させ鎮圧したのである。

形のうえで一応祖谷を平定した

家政は、代官として渋谷安太夫をさ

し向け、政所（庄屋）は喜多六郎

三郎に命じた。

兩名は相談のうえ、祖谷は土佐

との国境にあり、長宗我部の残党

と土民が内通して謀反を起す恐れ

ありとして、

「刀狩り」

を家政に願出たのである。

元和三年（一六一七）十一月

十一日、代官渋谷安太夫は、

「蜂須賀公が祖谷の名刀をご覧に

なる」

と詐って栗枝渡神社の境内に

武器を悉く集めた。それは境内の

に映える午後のことであった。

「これこそ父祖伝来の家宝なり」

と競って持参した名刀二七振

を、

「借上げ」

と称して一宮城（現徳島市「渭

津」とも書く）へ送り、

「召上げ代物の儀は後日沙汰する」

といったまま元和五年

（一六一九）になっても代銀

は支払われなかった。

家宝を代官に詐取されたと気づ

いた名主たちは、十八名の代表者

と六百七十余名の百姓を一宮

へ送り、

「父祖伝来の家宝なれば、何とぞお

返しくされ」

と家政に直訴させた。

家政は「徒党を組むは曲事なり」

と激怒して、代表者十八名を鮎喰

川原で磔刑にし、その一族も斬首、

残りの者は誓紙を書かされ割竹で

尻叩きのうえ釈放された。

百姓たちは空腹と痛みによる

めきながら、冷雨の中を吉野川にそ

って、ある者は杖にすがり、ある

者は友に背負われて祖谷へ帰った。

待ちうけた家族たちはむせび泣

き、雨戸を閉じて三日間食を絶ち

犠牲者の冥福を祈った。

（以上10月1日放送分）